

お時儀

芥川龍之介

青空文庫

保吉やすきちは三十になつたばかりである。その上あらゆる売文業者のように、目まぐるしい生活を営んでいる。だから「明日みょうにち」は考えても「昨日さくじつ」は滅多めったに考えない。しかし往來を歩いていたり、原稿用紙に向つていたり、電車に乗つていたりする間あいだにふと過去の一情景を鮮あざやかに思い浮べることがある。それは従來の経験によると、たいてい嗅きゆう覚かくの刺戟せきげきから聯れん想そうを生ずる結果らしい。そのまた嗅覚の刺戟なるものも都会に住んでいる悲しさには悪臭と呼ばれる匂においばかりである。たとえば汽車の煤煙の匂なは何なん人も嗅かぎたいと思うはずはない。けれどもあるお嬢さんの記憶、
 ——五六年前まえに顔を合せたあるお嬢さんの記憶などはあの匂を嗅

ぎさえすれば、煙突から迸る火花のようにたちまちよみがえつて来るのである。

このお嬢さんに遇つたのはある避暑地の停車場である。あるいはもつと厳密に云えば、あの停車場のプラットフォオムである。当時その避暑地に住んでいた彼は、雨が降つても、風が吹いても、午前は八時発の下り列車くだに乗り、午後は四時二十分着の上り列車のぼを降りるのを常としていた。なぜまた毎日汽車に乗つたかと云えば、——そんなことは何でも差支えない。しかし毎日汽車になど乗れば、一ダズンくらいうちの顔馴染かおなじはたちまちの内に出来てしまう。お嬢さんもその中の一人である。けれども午後には七草ななくさから三月の二十何日かまで、一度も遇つたと云う記憶はない。午前

もお嬢さんの乗る汽車は保吉には縁のない上り列車である。

お嬢さんは十六か十七であろう。いつも銀鼠ぎんねずみの洋服に銀鼠の帽子をかぶっている。背せはむしろ低い方かも知れない。けれども見たところはすらりとしている。殊あしに脚は、——やはり銀鼠の靴くつした下かかとに踵かかとの高い靴をはいた脚は鹿の脚のようにすらりとしている。顔は美人と云うほどではない。しかし、——保吉はまだ東西を論ぜず、近代の小説の女主人じょしゅじんこう公こうに無条件の美人を見たことではない。作者は女性の描写になると、たいてい「彼女は美人ではない。しかし……」とか何とか断ことわっている。按あずるに無条件の美人を認めるのは近代人の面目めんもくにかかわ関かわるらしい。だから保吉もこのお嬢さんに「しかし」と云う条件を加えるのである。——念ねんのた

めにもう一度繰り返すと、顔は美人と云うほどではない。しかしちよいと鼻の先の上った、愛敬あいきようの多い円顔まるがおである。

お嬢さんは騒さわがしい人ごみの中にぼんやり立っていることがある。人ごみを離れたベンチの上に雑誌などを読んでいることがある。あるいはまた長いプラットフオオムの縁ふちをぶらぶら歩いていることもある。

保吉はお嬢さんの姿を見ても、恋愛小説に書いてあるような動悸うきなどの高ぶった覚えはない。ただやはり顔馴染みの鎮守府司ちんじゆふ令長官や売店の猫を見た時の通り、「いるな」と考えるばかりである。しかしとにかく顔馴染みに対する親しみだけは抱いだいていた。だから時たまプラットフオオムにお嬢さんの姿を見ないことがあ

ると、何か失望に似たものを感じた。何か失望に似たものを、——それさえ痛切には感じた訣わけではない。保吉は現に売店の猫が二三日行くえを晦くらました時にも、全然變りのない寂しさを感じた。もし鎮守府司令長官も頓死とんしか何か遂げたとすれば、——この場合はいささか疑問かも知れない。が、まず猫ほどではないにしろ、勝手の違う気だけは起つたはずである。

ところが三月の二十何日か、なまあたか生なま暖あたい曇天の午後のことである。保吉はその日も勤め先から四時二十分着の上り列車に乗った。何でもかすかな記憶によれば、調べ仕事に疲れていたせい、汽車の中でもふだんのように本を読みなどはしなかつたらしい。ただ窓べりによりかかりながら、春めいた山だの畠はたけだのを眺めてい

たように覚えている。いつか読んだ横文字の小説に平地を走る汽車の音を「Tratata tratata Tratata」と写し、鉄橋を渡る汽車の音を「Trararach trararach」と写したのがある。なるほどぼんやり耳を貸していると、ああ云う風にも聞えないことはない。——そんなことを考えたのも覚えている。

保吉は物憂いものう三十分の後のち、やっとあの避暑地の停車場ていしやばへ降りた。プラットフォオムには少し前に着いた下り列車も止っている。彼は人ごみに交まじりながら、ふとその汽車を降りる人を眺めた。すると——意外にもお嬢さんだった。保吉は前にも書いたように、午後にはまだこのお嬢さんと一度も顔を合せたことはない。それが今不意に目の前へ、日の光りを透すかした雲のような、あるいは

猫ねこやなぎ 柳やなぎの花のような 銀ぎんねずみ 鼠ねずみの姿を現したのである。彼は勿論「おや」と思った。お嬢さんも確かにその瞬間、保吉の顔を見たらしかった。と同時に保吉は思わずお嬢さんへお時儀じぎをしてしまった。

お時儀をされたお嬢さんはびっくりしたのに相違あるまい。が、どう云う顔をしたか、生憎あいにくもう今では忘れていゝ。いや、当時もそんなことは見定みさだめる余裕を持たなかつたのであろう。彼は「しまった」と思うが早いか、たちまち耳の火照ほてり出すのを感じた。けれどもこれだけは覚えていゝ。——お嬢さんも彼に会釈えしやくをした！

やっと停車場の外へ出た彼は彼自身の愚ぐに憤りを感じた。なぜ

またお時儀などをしてしまったのであろう？ あのお時儀は全然反射的である。ぴかりと稲妻いなづまの光る途端に瞬きまたたをするのも同じことである。すると意志の自由にはならない。意思の自由にならない行為は責任を負わずとも好よいはずである。けれどもお嬢さんは何と思ったであらう？ なるほどお嬢さんも会釈をした。しかしあれは驚いた拍子ひょうしにやはり反射的にしたのかも知れない。今ごろはずいぶん保吉を不良少年と思つていそうである。一そ「しまった」と思つた時に無躰ぶしつけを詫わびてしまえば好よかつた。そう云うことにも気づかなかつたと云うのは……

保吉は下宿へ帰らずに、人影の見えない砂浜すなはまへ行つた。これは珍らしいことではない。彼は一月五円の貸間と一食五十銭の弁

当とにしみじみ世の中が厭いやになると、必ずこの砂の上へグラスゴ
オのパイプをふかしに来る。この日も曇天の海を見ながら、まず
パイプハマツチの火を移した。今日きょうのことはもう仕方がない。け
れどもまた明日あすになれば、必ずお嬢さんと顔を合せる。お嬢さん
はその時どうするであろう？ 彼を不良少年と思っていれば、一い
瞥ちべつを与えないのは当然である。しかし不良少年と思っていなけ
れば、明日もまた今日のように彼のお時儀に答えるかも知れない。
彼のお時儀に？ 彼は——堀ほり川かわ保やす吉きちはもう一度あのお嬢さん
に恬てん然ぜんとお時儀をする気であろうか？ いや、お時儀をする気
はない。けれども一度お時儀をした以上、何かの機会にお嬢さん
も彼も会釈をし合うことはありそうである。もし会釈をし合うと

すれば、……保吉はふとお嬢さんの眉まゆの美しかったことを思い出した。

爾来じらい七八年を経過した今日、その時の海の静かさだけは妙あじやに鮮かに覚えている。保吉はこう云う海を前に、いつまでもただ茫然と火の消えたパイプを啣くわえていた。もつとも彼の考えはお嬢さんの上にばかりあつた訣わけではない。たとえば近きん々きんとりかかるはずの小説のことも思い浮かべた。その小説の主人公は革命的精神に燃え立った、ある英吉利語イギリスの教師である。鯁こうこつ骨の名の高い彼の頸くびはいかなる権威にも屈することを知らない。ただし前後にたった一度、ある顔馴染かおなじみのお嬢さんへうっかりお時儀をしてしまったことがある。お嬢さんは背は低い方かも知れない。けれども見

たところはすらりとしている。殊に銀鼠の靴下の踵かかとの高い靴をはいた脚は——とにかく自然とお嬢さんのことを考え勝ちだったのは事実かも知れない。………

翌朝よくあさの八時五分前まえである。保吉は人のこみ合つたプラツトフオオムを歩いていた。彼の心はお嬢さんと出会つた時の期待に張りつめてゐる。出会わずにすましたい気もしないではない。が、出会わずにすませるのは不本意のことでも確かである。云わば彼の心もちは強敵との試合を目前に控えた拳闘家けんとうかの気組みと変りはない。しかしそれよりも忘れられないのはお嬢さんと顔を合せた途端とたんに、何か常識を超越した、莫迦ばか莫迦ばかしいことをしはしないかと云う、妙に病的な不安である。昔、ジアン・リシユパンは通り

がかりのサラア・ベルナルへ傍ぼう若無じゃくぶじん人の接吻をした。日本人に生れた保吉はまさか接吻はしないかも知れないけれどもいきなり舌を出すとか、あかんべいをするとかはしそうである。彼は内心冷ひやひやしながら、捜さがすように捜さないようにあたりの人々を見まわしていた。

するとたちまち彼の目は、悠々とこちらへ歩いて来るお嬢さんの姿を発見した。彼は宿命を迎えるように、まっ直すぐに歩みをつづけて行つた。二人は見る見る接近した。十歩、五歩、三歩、——お嬢さんは今日の前に立つた。保吉は頭を擡もたげたまま、まともにお嬢さんの顔を眺めた。お嬢さんもじつと彼の顔へ落着いた目を注いでいる。二人は顔を見合せたなり、何ごともなしに行き違お

うとした。

ちようどその刹那せつなだった。彼は突然お嬢さんの目に何か動揺に似たものを感じた。同時にまたほとんどからだじゆう体中にお時儀をしたい衝動を感じた。けれどもそれは懸け値なしに、一瞬の間の出来事だった。お嬢さんははつとした彼を後ろうしろにせずともう通り過ぎた。日の光りを透すかした雲のように、あるいは花をつけた猫ねこのやなぎ柳のように。……………

二十分ばかりたつた後のち、保吉は汽車に揺られながら、グラスゴオのパイプを啣くわえていた。お嬢さんは何も眉毛ばかり美しかった訣わけではない。目もまた涼しい黒瞳くろめが勝ちだった。心もち上を向いた鼻も、……しかしこんなことを考えるのはやはり恋愛と云うので

あろうか？——彼はその間にどう答えたか、これもまた記憶には残っていない。ただ保吉の覚えているのは、いつか彼を襲い出した、薄明るい憂鬱ばかりである。彼はパイプから立ち昇る一すじの煙を見守ったまま、しばらくはこの憂鬱の中にお嬢さんのことばかり考えつづけた。汽車は勿論そう云う間も半面に朝日の光りを浴びた山々の峽を走っている。「Tratata tratata tratata trararac

コ

(大正十二年九月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiya

校正：earthian

1998年12月28日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

お時儀

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>